

テーマ：

神の法

ザコン ポージイ
Закон Божий

《祈禱について I》

「我、爾等の父となり、爾等、我の子女とならん、
主全能者、之を言う」
(コリンフ後書第6章18節)

今回のテーマは、「祈禱について」です。

祈禱は、主・神と話すこと、対話することです。人間にとって、主・神と話すとは、どういうことなのでしょう。

主・神と直接顔を合わせて話すことができた人間は、樂園に居た最初の人間、アダムとエワだけです。樂園を追放された後の人間は、直接主・神と見えることがなくなり、その対話は以前に比べると不完全なものとなりました。主・神と人間との距離が離れれば離れるほど主・神と人間との対話も不完全なものとなっていきます。その原因となっているのは、人間の「罪」です。主・神の教えに従わず、御心に背くことを「罪」と言いますが、アダムとエワも、食べてはいけないといわれた木の実を食べたことによって、主・神と直接見える機会を失いました。

人間にとって主・神との対話(祈禱)とは、空気や食物と同じくらい必要不可欠なものです。祈禱を行わないと、人間は神のことを忘れ、神を愛することを忘れ、神に造られた自分の本分を忘れ、容易に罪を行うようになります。捧神者聖イグナティイと言う聖人は、「神を捧つる」という字からも解るように、自分が呼吸する回数ほど絶えず神の名を記憶していたと言われます。嬉しいことがあったときも、悲しいことがあったときも、人生のどのような局面においても主・神との絶えざる対話が必要なのです。

隠遁者でない私たちが、この世で仕事をし、生活しながら、「絶えざる主・神との対話」を実現するのは簡単なことではありません。しかし、朝起きてから夜寝るまで、一度も主・神のことを考えなかったというのでは、あまりにも怠惰です。

朝覚め起きて主・神に感謝し、仕事をしながら主・神に祝福を請い、食事をしながら主・神を讃美し、夜寝る前に主・神に痛悔するなど、道を歩きながらでも、部屋を掃除しながらでも「主、憐れめよ」と心の中で唱え、自分の思いが主・神に届いている人は、常に祈禱をしている人です。

祈禱をするときに、忘れてはいけないのは、自分の心の状態です。怒りや恨み、妬みから出る祈禱を主・神は受け入れません。先ずは自分の心から汚れた思いを捨てましょう。

もう一つ忘れてはいけないことは、「祈禱」とは主・神への命令ではありません。いつ、どんな状況において、どのように主・神が自分の祈禱に答えてくれるのかは、忍耐を持って待ちましょう。私たちの創造主である主・神は、私たちよりも何が私たちのためになり、何が私たちのためにならないかを知っておられるのです。